

6月9日にSPS認証2周年を迎えました。3年目も、ヒヤリハット事例の収集、情報共有を中心に日々の生活から学校安全の意識を高めていきたいと思ひます。今回は、5月・6月に実施した学校安全の取り組みについて紹介しします。

5月・6月の取り組み

- 5月21日(水) 緊急時対応訓練 (スクールバス乗車時、児童生徒の様態急変対応)
- 27日(火) 不審者対応訓練
- 28日(水) 朝研修「てんかんについて」
- 30日(金) 京都市立養徳小学校視察 (アレルギー対応)
- 6月4日(水) 朝研修「ASUKAモデル」
- 9日(月) 学校安全研修会(本校・市内小中学校)「航空安全の視点から学校安全を見直す」
関西国際大学 国際コミュニケーション学部 観光学科 安藤正裕 教授
- 11日(水) 合同避難所設営訓練 (小野起生園)
- 18日(水) 小野市学校安全実践員会
小野市学校安全推進委員会
- 25日(水) 近隣校交流での避難訓練 (河合小学校)



<緊急時対応訓練> (小野市消防本部救急課、河合小学校)

5月21日(水)に、スクールバス乗車中に児童生徒の様態急変への緊急時対応訓練を行った。

昨年度、実施した際に、運転手や支援員にとって「HANAモデル」の役割カードが有用であること。また、現場から連絡を受けて小野特別支援学校から応援に行くのに時間がかかるので、近隣の学校や施設に応援を依頼し、より素早い救助を目指すことなどが反省に挙げられていた。そこで、今回、役割カードの見直しを行うと共に、今回の訓練の近隣校である河合小学校の職員に訓練参加を依頼し連携して実施することになった。



振り返り運転手・支援員、生徒役、応援職員(河合小、本校)より自分の役割を自覚し行動できたか振り返り、最後に小野市消防本部救急課の方よりお話ししていただいた。

良かった点としては、様態急変から近くの安全スペースに停車後、役割カードを確認し、小野特別支援学校と河合小に速やかに連絡できた事。それにより、河合小の職員が速やかに多数応援に来ていただき、

現場の記録や心肺蘇生を早い段階で、河合小職員に代わってもらえたこと。また、本校だけでなく、河合小の本部でも時系列による記録を残して2重の確認ができていたことが挙げられる。

課題としては、現場で「誰がどう判断するのか」が定まらず、河合小学校職員に沢山応援に来てもらったが、誰に何を依頼すればいいかが運転手や支援員だけでは難しかった。

臨機応変な河合小学校の先生方の動きと、本校の応援の確実な役割の動きで無事、救急隊に情報共有し、引き渡すことができた。

最後に今後に向けて、119のタイミングやライブ119の使い方、救急隊や保護者への連絡の内容、必須事項について等、具体的な事例をもとに小野市救急課の方より助言をいただいた。

今回の訓練をもとに、緊急時に、より速やかに確実に児童生徒の命を守るための組織的な行動ができるよう、仕組みの積み上げと意識の高揚を図っていきたい。



<不審者対応訓練> (小野警察署)

5月27日(火)に、不審者対応訓練を行いました。事前学習では、「いかのおすし」の合言葉に基づき、スライドとロールプレイで不審者に遭遇した時の対応方法を学んだ。毎年の学習の積み重ねで、頭文字から約束を答えられる児童生徒が増えていた。ご家庭でも、一緒にご確認下さい。

いか：ついて「**いか**」ない
の：人の車に「**の**」らない
お：「助けて」と「**お**」お声をだす
す：安全な場所へ「**す**」く逃げる
し：周りの人にすぐ「**し**」らせる

不審者が学校に侵入した場合は、教室をロックし、バリケードを作り入られないようにする、静かに物音を立てないように過ごすよう確認した。

実際の訓練では、児童生徒は先生方の話をよく聞き、安全に教室で待機、避難できた。



教職員の役割：本部、GOGO 班（初期対応）、レスキュー班（初期救急）、避難誘導班、救出班、救急班、搬出連絡班に分かれ、事前に役割の確認を行った。緊急放送後、初動で速やかに動く GOGO 班、レスキュー班と、児童生徒の安全を確保してから動くその他の班で目的や動きが異なることを再確認し目標を設定して訓練に臨んだ。

訓練後は、GOGO 班の距離の取り方やさすまたの使い方、不審者の位置の知らせ方や応援の求め方、レスキュー班の動き等、警察の方から助言をいただいた。その後、全員で役割ごとに協議し、学校安全推進委員会や生活安全チームで、助言・反省をもとに対応の改善について協議しました。

全職員で、より安全に組織的で安全な対応ができる体制づくりにつなげていきたい。

<小野特別支援学校 学校安全研修会>

6月9日(月)に、学校安全研修会を実施しました。関西国際大学国際コミュニケーション学部観光学科安藤正裕教授を講師に迎え、「航空安全の視点から学校安全を見直す」というテーマでご講演いただいた。市内の小中学校の先生方も参加し、充実した研修会になった。

内容は、航空業界の具体的な安全活動についての話や安全における重要な考え方についての話であった。前号で紹介した SHELL モデルによるヒューマンエラー軽減の取り組みや、ヒューマンエラーについて考えるケーススタディの演習、スイスチーズモデルの詳しい構造について、具体的な事例をもとに話をしてもらった。

印象的だったのは、以下の安全の定義であった。



「安全」はこの世には存在しない。存在するのはただ「危険」だけである。それら潜在する危険因子が顕在化しないよう努力し続けた結果、何事も起こらなかった状態を「安全」という。危険因子を排除し続ける努力を一瞬でも怠れば「危険」は事故という形で顕在化する。 日本 Human Factors 研究所長(故)黒田勲 博士

1つのエラーが大勢の命を危険にさらしてしまう航空業界の取り組みから、「危険」についての重みを学ぶことができた。